

してゆく——というようなかたちをとって成り立ってゆく自然科学なのである。それに実験したり 実際に肉眼でその全ぼうもしくはその実態をみきわめることができない。つまり遺跡や片りんや ときによるとむかしの生物のからだのかたちや砂や泥でおきかえられた化石のそのまた外型をみつけることによって かつてそこに生じた現象や生存していた動植物の生活を「推定」するというきわめて非定量的な扱いをしなければならないのだから いきおい1+1=2というようなビタリとした答えは期待できないのが真実の姿である。

だからそこに表現のうえで いろいろさまざまな誤解を生む機会が待ち伏せているとあってよい。とくにその表現を わかりやすい表現で示そうとすると とかくその誤解を生む機会は増加 拡大されやすい。

そこでたしかに 「基本的にはご指摘のとおりだがしかし高校1年生の段階では そのままでは理解されにくいし 著者自身知ってはいても そういう風に書かなかつたり」あるいは「学問的な正確さということで批判されればきりのないことで 学者によってすでに意見のわかれていることもあるし あると書くのはあるいはいい

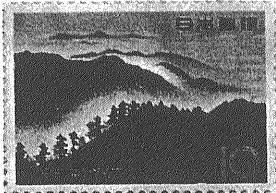
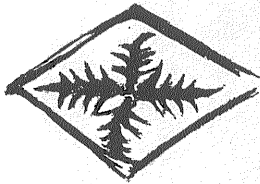
い過ぎかもしれないが ではとってまったく主張するのはいささか大胆すぎる」というような微妙なやりとりが 間違いだらけの教科書と指摘された地学の教科書をめぐって その著者と批判の場に立つ第三者との間にとりかわされるのである。

ともあれ 地学にはその本質からして表現に同情すべき余地がありはするが さりとて Yes か No かがひとむかし前よりはっきりしており こんだ電車のなかで人の足をふんでも “ごめん” とひとことあやまるだけの余裕すらもたなくなったジェット時代の社会風潮からみると それだけ慎重かつ安全にもの申す必要があり くわしきは省略しても 正確さと理解のしやすさとが優先させられてよいものと思う。

しかし残念ながら 輸入文化に由来した科学部門では何でも分類されているものはみんな示されていないとよい本でないし 表記されている数字はラウンドナンバーより下のけたまでこまごまと数字が並んでいる方が高級な本だという なげかわしい庶民根性が根強く残っているのが現状である。

理解しやすい表現で 目の前にそのものをみるような書き方で地球について書かれるときに わたしたちはたぶん わたしたちの身近かにしたしみをもって 地球に関するもろもろのできごとを学びとることができるであろう。

(筆者 地質部長 次回からしばらく休載)



地学と切手

堀内 恵彦

金剛生駒国定公園

古くから関西の人々にはなじみの深い行楽地で 大阪・奈良県境の生駒山を中心とした山系と金剛山を主峯とする金剛・葛城・和泉の山系一帯が 公園地域に指定されています。この付近は古くから発達した河内・大和の交通の要地に当たっていたので 山麓には社寺や史跡が多く また山上の展望もすばらしいものがあります。

おもな社寺としては お染久松で有名な野崎

観音 生駒聖天で有名な宝山寺 信貴山 緑起 絵巻で有名な信貴山の朝護孫子寺 奈良朝時代の建造物蓮糸のまんだらで有名な 当麻寺 修験道で有名な金剛山 女人高野として有名な天野山 金剛寺などや楠木正成の居城として有名な赤坂城跡 また1000人の部下で100万の敵をなやました千早城跡などもあります。

公園地域はおよそ156,246km² 指定は昭和33年4月10日で 切手発行は 昭和37年5月15日 金剛山系の山並をグラビア4色刷に現わしてあります。

(筆者は元所員 現科学技術情報センター)